

## 令和6年度 吉田町総合教育会議 会議録

- 1 開催期日 令和6年11月11日(月) 午後3時00分～午後5時30分
- 2 場 所 吉田町役場 5階会議室2
- 3 出席者 田村 典彦 町長、山田 泰巳 教育長  
北澤 雅恵 教育委員、増田 真也 教育委員  
中村 成宏 教育委員、大石 佳彦 教育委員  
事務局 糸田 真男 学校教育課長、山脇 一浩 生涯学習課長  
岸端 準成 学校教育課長補佐、水嶋 浩之 主席指導主事  
田中 久美 指導主事、浅井 健 指導主事  
川本 貴浩 教育振興統括

### 4 議事内容

#### 1 開会

##### ○事務局

ただいまから令和6年度吉田町総合教育会議を開会します。本日は大変お忙しい中御出席を賜り誠にありがとうございます。本日の進行を務めます吉田町教育委員会事務局学校教育課の糸田と申します。よろしくお願ひします。

早速ですが、お手元にお配りした資料の次第に沿って進めさせていただきます。初めに、吉田町長から御挨拶申し上げます。

#### (1) 町長あいさつ

##### ○田村町長

皆さんこんにちは。この頃よく考えるのですが、私もある意味においては古い時代の教育を受けた人間ですが、考え方としては非常に新しい考えを持っています。ある意味ではそのギャップをよく知っていると自分なりに理解しているのですが、本当に難しい時代になったというのが実感です。大体、子供の数が恐らく70万を切ると言っていますね。団塊の世代、昭和47年から49年。大体270万ですよ。4分の1になってきたと。そんな子供たちに対して、もちろん、その子供たちが将来この国を背負うわけですよ。小さな単位で言えば吉田町を。それから、静岡県を。大きく言えば日本を。また、海外に出ていく人も多いでしょうから、世界を。そういう子供たちに我々は期待するところがこれまで以上に

大きくなっていきますよね。まさに混迷の時代を迎えるわけです。そうした時に、子供たちにどのような教育を授けたらいいのか。また、子供たちはどういう教育を受けたいと考えているのか。双方向で考えていかないとならない時代になってきたと私は思っています。

一方においては、子供たちは1人1台デジタル機器が与えられて、デジタル教育がものすごい勢いで進んでいます。これも時代のすう勢ですよね。しかしながら一方において、確かにデジタルの世界というのは我々にも理解はできるのですが、本当の世界に入るとデジタルの世界ではないですよね。アナログの世界ですよね。アナログの世界がベースにあります。そういうふうに考えると、デジタルの世界ともう一方にあるアナログの世界。極端なことを言えば、文章を読んでそこに何が書かれているのか、それを読み解くことが非常に求められています。一方において、デジタルがものすごく進んでいます。しかしながら、そこに何が書かれているのか。それを理解することは並行的に大きく求められます。デジタルの方ばかり強調されるものですから、子供たちの文章理解力が追い付いていかない傾向にあると私は考えています。

その二つのデジタルとアナログの世界が双方向により緊密な形で重ね合わせるようにやっていかないと、まともな人間になっていかないのではないかと、こんなふうに思っています。今日、これから皆さんと話す、例えば部活の地域移行の問題であるとか、これも本当に難しい問題を抱えています。そういう問題をひとつひとつ解きほぐしながら、ぜひとも吉田町の教育がより良い方向に進んでいく、より確実で子供たちにとってより良いものになると、そういうふうなことを考えないといけないと思っています。皆さんからきたんのない御意見を賜りたいと思っています。

今日は初めての方がおりますので、外から見た意見等を教えてください。うれしく思います。

○事務局

ありがとうございました。続いて、山田教育長から御挨拶をお願いいたします。

## (2) 教育長あいさつ

○山田教育長

改めましてこんにちは。お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。日頃、本当に様々な意見を出していただき本当に助かっています。今、町長から子供の学びの視点からのお話だったかなと自分は受け止めたのですが、子供の学びを充実させるためには、教員の指導力がどうしても欠かせない形になります。ここ数年のニュースを見ていると、とにかく教員のなり手不足というか、

なかなか教員になってくれる人がいなくて、欠員状態のままにいるということが話題になっております。先日のニュースの中では、高知県で 280 人の採用試験の合格者を出したにもかかわらず、その中の 204 人、約 7 割が辞退をしたというニュースも全国的に流れていました。各県によって状況は違うと思いますが、小学校の倍率に限って言うと、静岡県は本年度 2.9 倍でした。ところが、全国的に見ると、秋田県は 1.0 倍というニュースが出ていますね。今、政令市は政令市で独自に採用試験をやっていますので、政令市と都道府県を合わせると 60 いくつあると思いますが、1 倍台というところが全部で 22 ありました。それだけ全国的に厳しい状況が続いているというのが、今のなり手不足に関するニュースかなと思っています。

教育というのは、人があってというか、教師あってやっぱり成り立つところがありますので、今日、話をさせていただく部活動の地域移行や T C P トリビンスプランも教師にとっても子供にとっても保護者にとってもという、三者共益の話をしているのですが、教員が子供にとって憧れるような存在になっていく教育ができていかないと、なかなか手不足は解消しないのではないかなと思っています。単に処遇改善だけをしていても、人は増えていかないのかなと思います。そうした意味で、今日 2 本の柱で話をしますが、ぜひきたんのない意見をいただいて、吉田町の教育が充実していくようお願いできればと思います。町長こうして話ができる機会は、年に何回かという形になりますので、是非よろしくお願いします。

#### ○事務局

ありがとうございました。それでは、議事に入ります。ここからの議事進行は町長にお願いします。

## 2 議事

### (1) 部活動の地域クラブへの移行について

#### ○田村町長

それでは、次第に沿いまして、本日の議事を進行していきたいと思います。本日の議事は二つです。

まず、最初に「部活動の地域クラブへの移行について」を議題といたします。事務局から説明を求めます。よろしく申し上げます。

#### ○事務局

それでは初めに資料 No. 1 - 1 を御覧ください。こちらの資料は、近年の生徒数の大幅な減少や、休日の部活動の指導時間の増加による教師の負担増などによ

り、学校部活動の維持が難しい状況となっていることを鑑みまして、令和4年12月にスポーツ庁と文化庁が学校部活動の改革をするためのガイドラインを示したものです。こちらの資料のⅠからⅣの項目がありますが、資料右側のⅢを御覧いただきますと、こちらに主な内容ということで、5つのことが書いてあります。こちらの1つ目で、「まずは休日における地域の環境の整備を着実に推進」とあります。そして上から4つ目ですが、「令和5年度から令和7年度までの3年間を改革推進期間として地域連携・地域移行に取り組みつつ、地域の実情に応じて可能な限り早期の実現を目指す」とあります。このように国としては、令和7年度をめどに休日の部活動から段階的に地域移行をしていくことを基本とする改革の方向性を示しています。

それでは、吉田町としては部活動改革をどうするのかということですが、資料No.1-2を御覧ください。こちらは吉田中学校部活動の地域移行のスケジュールです。まず左から2番目のR5の枠内を御覧ください。その①にありますが、吉田町としては先ほど説明した国のガイドラインを受けて、昨年度、「吉田町部活動の在り方協議会」を設置しました。この協議会は、吉田中学校の先生方や、体育協会・文化協会・自治会・町内小中学校保護者の代表の方などを委員とした組織で、令和5年度は3回、今年度は2回協議会を開催し、吉田中学校部活動を今後どうしていくかを協議してきました。その協議会の中で、資料の右から2番目のR8を御覧いただきたいのですが、その②に記載があります「3年生生徒が部活動を引退後、地域移行(休日)の実施」、つまり、令和8年度に吉田中学校の3年生になる生徒が最後の大会等を終えて、部活動を引退する時期をめどに、休日の部活動を地域に移行するということを目指していくことを承認していただきました。そのことを達成するための手段についても、協議会の中で協議してきました。

それでは続きまして、資料No.1-3を御覧ください。こちらが吉田中学校部活動の地域移行の手段として、「吉田町地域クラブ」を立ち上げるというもので、詳細については今後も協議を重ねていきますが、「吉田町地域クラブ」を立ち上げるという手段を採用することについては、協議会で承認をいただきました。こちらの内容について、順を追って説明をさせていただきます。まず、1ページ目の1については先ほどの国のガイドラインのところで説明をさせていただいたようなことが記載されていますので、説明は割愛させていただきます。

2の「地域クラブへの移行の基本的な考え方」です。こちらについては、吉田町の部活動地域移行の理念とも言えることですが、協議会で承認を得ているのであります。下線が引いてありますが、「吉中生の「やってみたい・楽しみたい」に応える持続可能なクラブ活動」というタイトルで、三つの柱がありますので読み上げさせていただきます。(1)生徒の主体的活動。生徒が新しいことに挑

戦したり、自らの特技を生かしたり、将来の夢や目標を目指したりするために、主体的に取り組む活動とする。(2)楽しむ活動。競技力や技能の向上、心身の健康づくりなど、個々の興味・関心に応じて楽しく取り組むことができる活動とする。(3)持続可能な活動。町内1中学校というコンパクトさを生かし、地域で支える持続可能な活動とするというものです。

続きまして、3の「地域クラブの運営組織・体制」です。(1)の地域クラブの名称ですが、アンケートを採って決定する予定です。町内小中学校児童生徒と保護者及び教職員を対象者として、Googleフォームやきずなネット等を活用してアンケートを採り、地域クラブの名称について案を募集し、集まったところで事務局が候補を数点に絞り、再度対象者に対してアンケートを採り、最終的には来年2月下旬頃開催予定の今年度3回目の協議会において決定するものとしてと考えております。名称決定までのスケジュールは②に記載のとおり予定をしています。こちらの名称の決定方法についても、協議会で承認を得ましたので、このとおりに進めていきます。(2)のクラブ数については、吉田中学校の部活動等から想定されるクラブ及び総合型スポーツを想定していますが、こちらは今後協議をしていく予定です。2ページ目を御覧ください。(3)のクラブを運営するための事務局ですが、現在の想定としては、本町の教育委員会生涯学習課に部活動地域移行の業務を主として携わっていただく会計年度任用職員を任用し、コーディネーターとして位置づける予定です。こちらにつきましても、協議会で承認を得ております。(4)事務局の役割として、主に4つを挙げました。各クラブの年間計画の管理、指導者の勤務実績の管理、各クラブの加入生徒の管理(名簿管理)、学校との連携・連絡調整などがあります。

4の「地域クラブの指導体制」です。加入方式につきましては、自由加入制とします。(2)活動日・時間についてです。アに記載のとおり原則は休日の活動とします。イ「吉田町部活動ガイドライン」に則った活動とします。(ア)から(ウ)が、ガイドラインに記載されている活動日、時間、休養日の考え方です。読み上げさせていただきますと、(ア)週休日(土日)は、少なくとも1日以上は休養日とする。(イ)週休日等に大会参加等で休養日を設けることができなかつた場合は、平日の他の日に振り替えることとする。(ウ)休日の活動時間は、3時間程度(以内)とする。こちらも協議会で承認をいただいております。次に(3)指導者については、自身の活動経験や指導経験があり、教育的指導ができる者を任用するなどを想定しておりますが、指導者については課題が多いため、今後協議をしていく予定です。

5については、クラブを立ち上げるために想定される多くの課題とその課題を解決するための対応方法の案になります。まず、大きな課題の一つである(1)指導者の確保についてです。まず、確保方法ですが、コーディネーターが中心と

なり、事務局により体育協会・文化協会など、各種団体とヒアリングするなどして希望者を募ることを想定しています。こちらについては、どれか一つを採用するとは限らず、複数の案を同時並行で対応していくことも必要ではないかと考えられます。大きなイに記載しましたが、指導者が見つからない場合の部活動の休日活動については、指導者が見つかるまでの間、部活動として実施するという想定でおります。できる限り指導者を確保するよう努めていきますが、それでも確保ができない種目については、生徒の活動の場を維持していくためには、部活動を残すということも考えなければならないのではないかと考えています。

3ページを御覧ください。(2)指導者報酬ということで、こちらも大きな課題の一つであります。参考ですが、現在、町が任用している部活動指導員の報酬は時間当たり1,600円です。報酬金額をいくらとするかは、今後協議が必要です。負担の方法ですが、一つ目の案は受益者負担です。例えば、各クラブが加入者から徴収する会費からクラブで定めた金額を支払うなどの方法が想定されます。二つ目の案は公費負担です。例えば、事務局である教育委員会が各クラブから指導者の活動報告書の提出を受け、時間単位で報酬を支払うなどの方法が想定されます。原則、吉田町ガイドラインに準じていただいて、原則は1日3時間以内の指導をしていただくこととなります。三つ目の案は、受益者と公費の双方で負担するもので、例えば折半する案になります。次に、(3)活動費の確保についてです。平日は部活動を継続するため、部活動加入生徒の保護者から徴収する部活動費を主な財源とすることを想定しています。それ以外に必要な経費がある場合については、各クラブが加入保護者に説明した上で各クラブが徴収して活動費を確保するという案になります。(4)保険加入です。生徒につきましては受益者負担で加入、指導者につきましては、例えば、非常勤職員公務災害補償制度の活用などにより公費負担とすることを想定しています。(5)活動場所の確保については、原則、学校等の公的施設を活用し、吉田中学校の施設は地域クラブを優先し、使用料についても減額若しくは全額免除とすることを想定しています。(6)鍵の管理につきましては、現況、学校体育館等の公的施設を使用する場合は、生涯学習課に鍵を借りていただいておりますが、地域クラブの活動についても、同じように鍵を借りていただく想定でおります。(7)生徒指導上の問題への対応について及び(8)保護者等からの要望・苦情・トラブルへの対応、こちらの二つについては、同じ対応方法を想定しておりまして、対応方法の案としては、原則としてクラブで対応しますが、状況に応じて学校に連絡して情報を共有し、部活動顧問等と連携して対応するものです。次に、(9)平日と休日の指導者が異なることへの対応方法の案としては、大会参加、練習試合等について、連絡が取り合える状況をつくっておくというものです。最後に、(10)緊急時の連絡です。こちらの対応方法の案としては、グループライン等で保護者に連絡できる体制をつく

る。生徒への連絡は保護者を通して行うというものです。生徒への連絡は、大人から生徒ではなく、保護者を通して大人同士で行うことでトラブルを回避します。

今、説明した5番の課題と対応方法については、難しい問題がたくさんありますので、今後も協議会において継続して協議していきたいと考えております。

#### ○田村町長

説明が終わりました。それでは、これから教育委員の皆さんの御意見を伺い、協議をしてまいりたいと思います。

つきましては、皆さんから部活動の地域クラブへの移行についての御意見、期待すること又は問題点、心配点などを含めた御意見や、教育委員として、さらに保護者としてどう思うかなどの御感想を伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。

まず、総括的なところで、教育長の方からこれまでの協議会のことを踏まえてお話していただけますか。

#### ○山田教育長

今、事務局から説明がありましたが、資料1-3のような形で、項目を洗い出しながら、在り方協議会で話をしています。その中で前回、第2回の中で話題になった一つが、2番の基本的な考え方はこの3本柱でいいのかどうかということです。現在、中学校の部活動に関しても、全員加入制から自由加入制に変わっています。もちろん地域クラブについては、それぞれの考え方の中で自主的にやっていくという主体性を育むようなところで進めているということを中心に考えて、とにかく主体的にやれるような活動にしましょうということが一つ。それから、そこで活動をするそれぞれの目的は、それぞれで思っていることが違うと思うのですが、やらされて嫌々ながらやるような活動であっては、なかなか長続きもしないだろうということで、楽しむという表現にしてありますが、意欲的に、1番の主体性をつながるところがあると思いますが、それぞれの興味・関心に従って楽しめるような、そのような活動にしたいということと。あとは3つ目に書いてある持続可能というのは、子供の数も減少してきているわけですが、御承知のとおり教員の働き方改革も進んで、教員の中では部活動をやりたい人ばかりではないと、むしろ部活動はよそにしてもらいたいという人もいるのが現状です。そうなってきた時に、子供たちの活動の場が地域の中にあって、地域の方で支えられるような、吉田町は1中学校ですので、そうしたことを考えながら3つの柱を立ててありますので、委員の皆さんからもこの3つの柱についても御意見があれば、在り方協議会の方にも生かしていきたいと思っています。

この3つの基本的な考え方は、第2回在り方協議会において委員からは了承を得ています。

もう一つ話題になったのが、3番の(1)の名称です。まだ決まっていないのですが、例示として①に書いてありますが、「エンジョイよしだ」、楽しむ活動だよというところでエンジョイという言葉を使つての「エンジョイよしだ」。それから主体的なところをアクティブと表現して「アクティブよしだ」。この二つを例示していますが、一方的に我々の方で決めるのではなくて、広く関わるような人たちからのアンケートをすることによって、この地域クラブへの移行をみんな意識をしてもらおうと。意識をしてもらおう中で、こういうような活動にしてみたらどうだという願いがそこに込められて名前が付けられれば、それぞれ地域が支えるような持続可能なものにもなっていくのかなということで、アンケート的に募集をして、そこからいいものをピックアップし、例えばエンジョイよしだとかアクティブよしだもその中の一つに入れながら、五つ、六つの中から投票のようなアンケートをやってみたらどうかということで、前回の在り方協議会で話をしています。この辺についても、もし何か御意見があれば伺えればと思います。

それから、一番大きな課題になっているのが、指導者の確保になります。このあたりの指導者確保というのが、どうできていくのかというのが、今後の大きな焦点になっていくかなと思っています。このあたりについても委員の皆さんから御意見があれば伺いたいと思いますし、指導者の確保に伴って、財源が必要になってくる場所もありますので、そのあたりを併せて意見交換ができればと思っています。この場で結論を出すものではありませんので、意見をいただいた中で、在り方協議会の方に事務局でまとめながら提案をしていく形になればいいなと思っていますのでどうぞよろしくお願いします。

#### ○田村町長

今、教育長からありましたが、今日の総合教育会議では決めることはありません。皆さんから御意見等をいただいて、それを協議会に投げていく形になりますので、自分の思うことを素直に御意見賜ればよろしいかと思っています。

#### ○増田委員

まずは、全体的な地域クラブ活動への移行のことなのですが、文科省とスポーツ庁のガイドラインにもあるとおり、将来にわたって継続して楽しむことができる場がとても大事だと思っています。今回は、教員の負担軽減ということがありますが、それだけではなく、このように移行することによって、例えばこれまでは中学校・高校で部活動に入っていて、私の意識だとその期間だけ頑

張るという方が非常に多かったと思います。スポーツ・文化芸術というのは、生涯にわたって楽しむべきものであると、そういう意識転換ができる大きな機会だと思うので、この大きな流れについては大賛成です。

それで、吉田町地域クラブ案を確認しまして、先ほどの教育長の基本的な考え方については賛成ですが、ただ主体的な活動というのが、実際に確保できるのかは不安に思っているところがあります。休日移行から始めるということだと、平日は中学校の部活動に入っていて、休日だけやるとなると、例えばサッカーの部活をやっていた子だけが週末にサッカーの地域クラブに行ってしまう、他の人たちとの両立が非常に難しくなるのではないかという不安を持っています。そこが解決できるような対策というかやり方をしてほしいと思います。

あと、名称の募集についてはいいアイデアだと思いますので、皆さんに知っていただくいい機会だと思いますので、ぜひアンケートという形でやっていただければと思います。

指導者の確保については、非常に大きな問題なのですが、以前北澤委員がおっしゃっていたと思いますが、差が大きいと思うんですね、クラブによって。指導者がすぐに確保できる場所もあれば、非常に不安定な場所もあるという差が大きすぎるものですから、一律ではなくて、できる場所から始めていくということで、指導者が確保できたところから始めていく、順番にという考え方でいいのではないかなと思います。

指導者報酬については、どの生徒も平等にクラブ活動に参加できる機会を確保するために、できる限り公費の負担でお願いできればというのが強い思いです。これは、最終的に吉田中学校の生徒が地域クラブに移行していくということですが、最終的には生涯、町民が楽しめるクラブというのが理想ですので、ぜひ大人の参加も呼び掛けを広げていって、町民全体で地域クラブに参加する、支えるというようなものができていくといいなと思います。

#### ○大石委員

今、増田委員がおっしゃったことに関連するのですが、地域移行というものを踏まえると、ある種のアカデミーというか、この地域には大学はありませんが、大学設置基準に定義されるような大学ではなくても、これから市民みんなが一生学んだりできる場として発展していったほしいなというところがあります。

例えば、指導者の確保なのですが、指導者をどうやって認定するのか、あるいは、指導者の学びのような部分、他の文科省の施策にも関係していると思いますが、例えば、コミュニティ・スクールも全部地域ぐるみでいろいろ子供たちを育てていく、そして、地域を盛り上げていくところがあると思います。そういう中で地域の人たちにどう関わってもらえるのか、そこが非常に仕組みづくりにお

いて重要になってくると思います。

今、コミュニティ・スクールで探究の授業において、地元の企業の若手経営者が授業に協力したり、地元の母校を思ってくれる大人の方が学校を支えてくれる空気ができつつあります。他に探究学習で言えば、高校はいろいろな指定校がありますよね、スーパーサイエンスハイスクールなど。ああいったところに大学の研究者が教師としてやってきて、そこで一緒に探究の授業をやって、学校の先生も外部から来た方から学ぶことができ、お互いに刺激になり、外部からの人的な交流がすごく大事になるのではないかと思います。

指導者をどのように確保するのか。確保した指導者にもやりがいを持っていただくということで、どういう経験が提供できるのかということところが非常に制度づくりで大事になるのかなと思います。

#### ○中村委員

地域クラブへの移行の基本的な考え方なのですが、この三つが大事だなと思います。子供たちの健全育成のためには、主体的に取り組むところの大切さはあるでしょうし、運動あるいは文化的なものにしても、技能の上達といったものを訓練していく上で、技能が高まっていくから楽しいのであって、そういうことを経験することはとても大事ではないかなと思います。そういう意味では、技能あるいは競技力を高めることも欠かせないことだろうなと思います。

それから、持続可能な活動、ここがネックになるところだと思うのですが、これも子供たちの減少や部活動の減少も踏まえると、指導者にお願いする上でも将来なくなっていく活動をお願いするわけにいかないの、ある程度持続可能なものを想定していくことが大事かなと思ったりします。そういうことを考えていくと、クラブ数をどうしていくかということもとても重要なことであると思います。指導者の確保とクラブ数をどうするかというのは、相関関係にあるというか、一緒に考えないといけないことではないかなと思います。教育委員会でも視察をさせていただいて、その時に大まかに言うと二つありました。一つは、土日は新しい地域で活動を起こしているタイプと、比較的大きな町で中学校の活動をそのまま土日に移行して、中学校の先生が主にやっているタイプとどちらへ進んでいくのがいいのかなというようなことを考えた時に、そのまま現状あるクラブを土日に移行するのは、持続可能というところには当てはまらないこともあるかなと思います。現状、吉田町では両方ともあるし、総合型スポーツということも入れ込んで、ハイブリッドな形で収めているのではないかなと思いますが、今後も子供たちがどうしていくのか、例えば人数が痩せ細っていくようなクラブ活動を想定するのもしないのかということも含めて、指導者を確保することも考えていかないといけない課題だと思います。クラブをどうしていく

のかということ、かなり大きなことで指導者の確保と同じくらいのレベルのことではないかと思えます。

それと同時に、中学校のクラブ活動、土日ではないウィークデーのクラブ活動をどうするかという吉田町の方針が、中学校に跳ね返ってくるということも当然あるだろうなと思っています。例えば、総合型スポーツが多ければ、そういったものを部活動に設定することもあり得るかもしれないということも念頭に置きながら、決めていく必要があるのではないかと感じています。

#### ○北澤委員

地域クラブについては、町が子供たちの受け皿になる場所を作っていただくことがとてもいいなと思っています。小学校の間からサッカーや野球など自分の目標を持っていたり、すでにスポーツクラブで活動をされている方も多いと思います。しかし、中学校に入るとの楽しみの一つが部活動というお子さんもいると思います。そういった時に、自分の子供の時にはなくなるのだと不安になる保護者も多いと思うので、中身をあまり変えずに移行ができれば安心なのかなと思います。しかし、クラブ数については、子供の人数を考えるとこんなには難しいのではないかなと思います。子供の今の人数とニーズに合わせた、この先続けていけるものであるかどうかというのは、一つ一つ協議していただいて、発足できるものを提起していただくと安心なのかなと思いました。

中学校の間の部活動もすごく大事だと思います。私たちの頃は、吉中の野球部が全国優勝して、その盛り上がりのまま次の年もと思ったら、今度は監督となる先生が異動して、保護者とか子供たちにとっても重要なことだったと思います。自分たちの思い通りの活動ができるとは限らないということもあると思うので、そういったところも踏まえて、現代に合った、自分たちに合ったものを取り入れてくれるように吉田町には要望していくのではないかなと思います。子供たちが楽しむことというのがあって、子供たちが主体的に、自分が何をしたいのか、何に興味があってチャレンジしたいのかというのを持ってくれることが一番だと思います。そういった活動ができれば、どんな場所であれ、家庭では応援するのではないかなと思っています。

指導者の問題もすごく難しいと思っています。今までは当たり前のように先生がやってくれたものを、これを誰かやってくれないかと言った時に手を挙げてくれる体制であるかどうか。報酬も書いてありますが、これで本当にやってただけなのか、土日休みではない方もいらっしゃると思うんですね、やりたいと思っても。将来的に平日もとなった時に、子供たちの放課後の時間が早くなって、大人は働いている時間というので、なかなか合わないと思うんですね。どうしたら集まってくれるのだろうかと思うのですが、子供たちが主体的にと考え

た時に、生涯を通して楽しめるものを見つけてもらえるということで、名称も子供たちが考えたり、自分たちはどんなクラブをやりたいのかとか、大人だけで考えずに子供の意見も取り入れられるような協議会を開いてもいいのかなともこれを見ていて感じました。

子供たちがやる気になればなるほど、大人もどんどん熱くなっていくこともあると思います。中学校の間なので、3年もない活動になるとは思いますが、その間に自分たちがやりたかったことや挑戦したいことをどんどん取り入れられるような環境があって、卒業した後もOB・OGとなって支えられるような人材の育成も考えていくことができると、持続可能な部分を支えることができるのかなとも感じました。新しいことなので、いろいろな可能性が逆にあると感じています。だからこそ周知を早めにしていただいて、親だけではなく子供たちにも、今のスケジュールで言えば令和8年度の3年生というと、今の1年生が引退する時であって、対象は小学生になると思いますが、子供たちは割としっかりしていて、将来のことをいろいろ考えることも想像力豊かでいろいろなものが出てくることも考えられるので、吉田町で自分たちはどんなことをしたいのかというのも子供たちに投げ掛けられるテーマの一つではないかと思って見ていました。

不安要素がどうしても前に立ってしまいますが、その不安は、やってどんどん解消していくものなので、これからも部活動の在り方協議会でも話をされていくと思うのですが、どんどん具体的な案をいろいろ出していただいて、皆さんでより現実的に持続可能になれるようなものになっていただけたらいいなと思いました。

#### ○田村町長

今から7年か8年前になると思いますが、私が文科省に頼んで、ある人間をこちらに派遣してもらって、図書館で講演をしてもらったことがあります。その時に来た人間が、明治に学校が始まって、地域のをどんどん学校に負わせたあるいは学校が引き受けたということかもしれませんが、それが結局今の学校になっている。それでその重さに耐えかねて、先生方がとてもではないけど授業もできないと、いい加減にしてくれということで、それを一つ一つ剥がしていく過程が始まったんですね。

確かに、この根底には、先生の働き方改革があるんですね。要は、先生が単純な話、明日の授業の準備すらもできないように追いまくられていると言っていました。先生の過剰な仕事を取り除いて、明日の授業の準備をするような、そういうふうなことにしていかなないとおかしくなるよということがありました。それが単純な話、働き方改革というものです。

一方において、部活動の観点から言うと、外側にクラブというのがあるので、本当に好きな子はそちらでやりますよね。それと並行して部活動が全員加入ではなくて、好きな子だけやればいいと、それがどんどんこれまでとは違った方向に進んできているわけですね。そういう中でおそらくこういうふうな問題が出てきているわけですよ。そうすると、地域クラブへの移行と言うけれども、そういうことを踏まえて地域クラブになるわけであって、その時に一番大事なことは、増田委員が最初におっしゃったことですが、スポーツを楽しむ。日本の場合、あまりスポーツを楽しむという瞬間がないですね。

新しい本で非常に注目を集めているものがあるのですが、年寄りのスポーツ熱がものすごいですね。彼らはいろいろな大会とかではなくて、自分自身の能力をどんどん高めるところに行くんですね。単純な話、スポーツであるとかを楽しむ。そういうものを作る時の根底にないとならないということがあります。具体的に地域移行の問題になってくると、指導者の確保であるとかは当然出てきますが、そういう方向に行くのは必須であって、ここでも3年間の準備期間で行くわけですね。その時にどういうふうな形でソフトランディングできればいいのかと考えると、地域に行った時にどのような形が現在の地域の状況の中で生まれるのだろうか、そういう現実的な地域の状況の分析がないと、なかなか難しいと思います。単純な話、指導者の問題もそうでしょうし、例えば受益者負担にしたら、経済的に厳しい家の子は入れないのかというような問題になってしまいます。ある程度分かるような形で列記していかないと答えが出てこないような感じがしています。

だから、3年経つと学校から部活動がなくなってしまうという問題が極端な話、出てくるわけですよ。その時に先生方に対して、授業のための準備をしてくれと、先生が部活動をやっていると、それすらもできないじゃないかという問題も出てくるかなと思います。どこかではっきり線引きをする、はっきりこうするということを決めないとズルズルと行ってしまいます。じゃあ3年間のうちにこう行くというのを決定的に決めないと、前にも進みません。

私、昔ドイツにいた時に、ヨーロッパではスポーツをしたい子供たちは学校では一切やっていません。学校は勉強だけです。あとはそれぞれの子供は外に出てクラブ活動でやってくれと、はっきり線が引いてあります。そういった形にした方がいいと思います。そういう方向に何としても行くということはある程度決定的な形でも決めないと、この状態が続くと元の木阿弥になる可能性もありますし、結果として何もならないような形になってしまいます。ある程度学校は勉強するところで、スポーツをしたい人は学校の外でクラブ活動に入るという形で基本方針を決めないとまずいと思います。どこかで明確な方向を決めないといけないのではないかなと思います。明確に方向を決めたら、そこから逆算して

いけばいいとなってくると思いますが、その辺が明確ではないところが日本的なところなのかなと思います。そういうところを意見を上げて申し上げたいと思っています。

#### ○山田教育長

今、町長がお話をしたことは、価値観や考え方が昔とは変わってきているという社会の変化が起こってきていると。自分の認識の中では、日本のスポーツに関しては、競技力の向上を支えているのが部活動だったというのがずっと歴史的な背景の中にあるように思っています。当時、中学校で部活動というのは全員加入でやるのが当たり前だということで位置づけられていたものが、ずいぶん前からですが、全国的に希望加入の形に変わってきています。そうした希望加入に変わってきているという今の状況を親はどう見ているかという、今の親の時代はまだ全員加入だったのではないかと思います。だから、親は中学校に行ったら部活動があるということが当たり前のような感覚でいたのが、時代が変わってきて、地域クラブという話が出た時に、そこで北澤委員が言ったように何かが変わることに対する不安が出てきます。勉強も同じだと思うのですが、端末が入るということは親は経験していないので、こういうような学習をしていって本当に学力がつくののだろうかという不安があるのと同じように、何かが変わろうとする過渡期は必ず不安が付いて回るのではないかなと思います。現状を見ると、恐らく子供も教員も二極化していて、やりたくないという人と、やりたいという人が両方いる。それが過渡期なものだから、そこをどうやっていこうかというところに難しさが今あるのかなと思います。多分アンケートを採っても、両論になってくるのだろうなど。行政の方からすると、学校と相談をしながら、やっぱり一つの方向性を示して行って、そこに将来こういうふうに向かっていくのだというような理論的な整理・説明をして、それを実際にやっていくことをしていかないと変わっていかないだろうかなと思います。

以前、私もまだ教員をやっていた頃というのは、社会教育の方へというのが話題になったことがありましたが、結局うまく進められませんでしたね。それでは無理だろうという考えが先に立って、1歩がなかなか踏み出せなくて、全然変わっていきなかつたのですが、今は国のリードの中で動き始めているので、ここは動いていかないと考え方自体も変わることが難しいのかなと思っています。

先ほどの話の中で、周知という話がありました。先ほどの名称アンケートに伴って、今こうやって動いているよということを周知するのも一つの方法ですし、アンケート自体も小学校の中学年ぐらいから採っていかないと、まさに自分たちが関わるという親世代にも知ってもらわないといけないということがあります。当面は11月22日に小学校6年生、来年中学に入る子供と保護者の説明会

が中学校で行われるので、そこでは教育委員会の方からも説明をする必要があります。いきなり親に説明するわけですが、教員が知らなかったということになっては困るので、その前には教員に説明するということを学校でもやってもらうというふうにしなから、こうした動きを徐々にみんなに理解をしていってもらわないといけないと思っています。この動きが始まる前に、国が地域移行を言った時に、部活動がなくなるのではないかと地域の中に広がって行って、その噂が学校から部活動がなくなるから部活動に入らず地域のクラブの活動に入ろうということになって、野球やサッカーの部員が非常に少なく、4人の状態といったことが起こっていて、十分な理解や今後のスケジュール的なことの丁寧な周知ができていなかったのかなと思うので、その辺りは丁寧にやっていかないといけないと思っています。いずれにしても、考え方がこうして変わってくる時に、いろいろな意見はあると思うのですが、今、我々が考えられる範囲の中で、こういうふうにしていこうという線はしっかりと出していくことが必要なことです。指導者の問題についても、きっと掘り起こしていけば1人でも2人でも出てくる可能性があるのですが、それも一つの周知の問題だと思いますので、ぜひ皆さんの中でも指導者の候補者がいたら、ぜひ紹介をしてもらいたいですし、こういう状況で今話していること自体も周知をしていってもらえるとありがたいなと思います。

○田村町長

今までの意見に対して、私はこうあるべきだとかこうした方がいいとか皆さんの御意見をお聞きしたいと思います。

○増田委員

北澤委員がおっしゃった子供の意見を取り入れることはすごくいいなと思いました。子供が何を考えているのか、柔軟な発想でいろいろアイディアを出してもらった方がいいなと思いました。

○大石委員

うちの息子が中学2年生で、少年野球をやっていて、部活がなくなるから野球部に入るのはやめようかなってみんな他のクラブに行ってしまうと、子供に何部に入るの？と聞いたら、テニス部に入りましたが、テニス部でうまい子たちはテニス部プラス榛原でやっているテニスクラブにも通いつつテニスをやっています。息子にそういう子に負けていいのかと言ったら、別にガンガン大会に出て勝つのが目的じゃなくて、小学校で野球、中学でテニス、あとはゴルフかなと言っています。いろいろスポーツを楽しみたいという子もいるのかなと感じます

し、息子の友達は一方で藤枝東FCに行っていて、自分はできれば藤枝東高校サッカー部に入りたいという明確な目標があったりする子がいるわけです。そういうところのいろいろなニーズを把握した上で、本当に部活として野球部・サッカー部を残すべきなのか、吹奏楽は楽器代や遠征で楽器を運んで発表会に出るとお金が掛かりますので、そういうところは果たしてどうしていくのかという個別具体的にいろいろ考えていく必要があるのかなと思いました。

あとは、指導者の件も、息子もたまに少年団へ小学生の手伝いに行ったりします。吉田高校はなくなりましたが、近隣の相良高校や榛原高校も同じ部活をやっている先輩たちがたまに来ていろいろ教えてくれるような仕組みができたらいいなと思いました。

#### ○中村委員

自分が小学校の指導をしていた時に、高校の陸上部に来てもらって教えてもらったら意外と反応が良くて、小学生にも良かったし高校生にも良かったので、そういった教えたり教えられたりというような関係はいいなと思うのと同時に、先ほども話題になった地域の企業の方に協力を願うという手もあるかなと思います。吉田町の企業でどんな活動があるか知らないのですが、金谷にいた時は、金谷の運動会の時に地域の企業の陸上部が来て走ったりしていました。そういう企業の力も借りられるとすごく参考になるし、企業の方も地域貢献につながることもあるのではないかなと思いました。

#### ○北澤委員

先ほど教育長が言っていたことですが、今の野球部はすごく人数が少なくなった時の経緯をもう少し教えていただければと思いました。地域移行に移るよと早めに情報を察知した保護者は、他のクラブチームに入ったりして、結局そういうので少なくなってしまって、結局、吉中の部活動として入る子が少なくなったと言うのですが、その4人は部活動にどんな思いで入ったのかなというのを今聞いていて知りたいなというのがあります。人数が少なくなってしまう部活だけど、そこで何をしたかったのか、学校側としては、部活動はある程度人数が少なくなると、活動ができなかったりすると、廃部を考えたりすると思いますが、先生方はその子たちをどう受け入れる体制をしようとしているのか、他の榛原とかのチームと合同でという話もあったと思うのですが、先生の考えと子供たちや家庭がどういう考え方で部活動を選んだのかがすごく知りたいなと思いました。

#### ○山田教育長

細かな思いまでは分かりかねますが、それぞれの小学校にスポーツ少年団がありますよね。そういう子たちが中学校に行っても継続してやりたいと、かつては多分そうだったと思います。ところが、国の動きの中で部活動がなくなるのではないかという話が広がった時に、多分そういう少年団の子供たち同士の中でもそういう話が出たりして、中学校ではなくて他にクラブがあるからと言って、いろいろなところに行ったのではないかと思うのですが、実はその時に部活がなくなるということは、こちらからは一言も言っていないで、正式には今度小学校から上がってくる子たちが3年生になった時から地域クラブに移行していくという話が今出ているので、中学生になっていた子供たちというのは、部活動がなくなるという話はしていませんでした。しかし、噂が広がっていったことで、中学校の部活に入らなくなってしまったと。結局、そういう噂が広がったということは、しっかりした情報が伝わっていないということなので、理解してこちらの方も情報発信をするかというところを国のこの動きが出た時に、きちんとやっていたかなかったことがこういうふうに影響してしまったかなということは思っています。

野球部が1人だった今の中学2年生というのは、多分経験していない子がその1人だと思いますが、スポ少とは全然関係のない子が入って、4人が今どうなのかは分かりませんが、当時は周知の問題があったのではないかなと予想されます。

○田村町長

そうだと思いますよ。基本的にはやはり学校は教育をするところで、スポーツをしたい人は外でやると、そういう流れがきています。文科省もそんな考えで動いている以上、基本的にうちの町もこうなりますというのをはつきり周知していくという作業、地ならしをしていかないとズルズルと行くような感じがしますね。やはり最終的には教育委員会として、こう行きますというのをはつきり示さないとまずい感じがしてならないです。

○山田教育長

下ろし方によっては波紋を広げる可能性がありますので、そこは上手にやらないといけないと思います。

○田村町長

そうですね。それは、ソフトランディングできるように下ろしていただければ。

○大石委員

先ほどの話で言うと、自分の子供はその当事者でいろいろな親の話を聞いてみると、野球をしっかりとやりたい子たちは部活どうかなというところで、中学校は軟式野球で、高校野球を目指しているなら中学から硬式野球をやりたいというところでクラブに行くけど、その中でも親がみんな共働きで忙しくて、近隣だと島田、大井川、菊川や浜岡になりますが、そういうところに子供を通わせることができないということで断念した子供もいますし、どこまで受け皿になれるのかなというところも含めて、いろいろ考えなければいけないことが多いように思いました。

#### ○増田委員

地域クラブに移行した時に、入った子のテンションの違いをどう調整するのかなと思っています。その時に遠くて大変だから地元の中学の部活に入ったけど、結局入ったらチームが成り立たないから合同チームで、結局、相良や榛原と行き来しないとなくなってきたという話も聞いたりします。

#### ○田村町長

実際にそういう家庭が出ていますよね。例えば子供を青森山田に入れたとか極端なことを言うところまでできています。今は過渡期なのでしょうけど、こういう方向に行くということを少しずつみんなに知らしめて、着地点を示さないともまずいような感じがしますね。

#### ○山田教育長

部活動自体も希望加入制ですが、この地域クラブも希望加入制なので、部活動を平日にやっているけれども、土日はここに入らない子が出てくる可能性もあるわけですね。そうすると、チーム競技だった場合に、大会に出るだけの条件をそろえられなくなる可能性もなくはないという意味での運営の難しさが今後ちょっとあるかなと思っています。先ほど、指導者の問題の中で、高校生のOBや大学生もいると思うのですが、そういう人たちが関わってくれるといいと思いますが、そういう人たちは、ボランティア的に顧問の先生のお手伝いをするようなイメージだったら来てくれそうな気がします。ただ、今後を考えた時に自分が監督になって、責任を持ってチームの面倒を見るとなった時に、どれだけの人たちが手を挙げてくれるのかということは、希望を取って見ないと何とも言えないところです。

#### ○田村町長

もう一つ忘れてはいけないのは、中体連という組織がありますよね。中体連が

いろいろな競技や試合をやりますよね。中体連がなくなると全部なくなってしまいますよね。そうすると、今度はクラブでやる試合とかになるので、ある意味ではすっきりする感じもします。中体連という組織が今後どうなっていくのかと。

○山田教育長

結局、最後の大会が中体連の大会なので中体連と言っていますが、でも1年間の中では協会サイドの試合がいっぱいあるので、試合の機会は1年間の中では何回もありますよね。個人的には、中体連がなくなった時に、それぞれの競技団体ごとになった時にどうなっていくのかということには非常に興味があるところでは。

## **(2) TCPトリビンスプランについて**

○田村町長

この話は尽きないものですから、この辺で打ち止めにして、次の議題に入りたいと思います。

次は「TCPトリビンスプランについて」を議題とします。事務局に説明を求めます。

○事務局

それではよろしくお願ひします。資料No.2-1から2-5までを使って、トリビンスプランアンケートの概要、結果について概要の説明をさせていただきます。説明ですが、資料No.2-5の一番最後のページの裏のところですが、そこにトリビンスプランの構想図がありますので、それを見ながら御覧いただきたいと思ひます。

それでは、TCPトリビンスプラン、本年度の評価アンケートですけれども、令和6年10月1日から9日までを実施期間として、教職員、子供、保護者を対象にアンケートを実施しました。アンケート内容ですが、今申し上げた構想図に左から青、真ん中がオレンジ、右が緑で示してありますが、この三つの柱に対する各指標、それから各施策に対して4段階で回答するというアンケートを採らせていただきました。資料No.2-1、資料No.2-2については、集計してありますが、コメントが書いてあるものはあえて4段階評価のCとD、あまり思わないとか全く思わないという評価を回答した場合に、その理由を記載させていただいています。

まず、資料No.2-1、教職員・子供の方から概要を説明します。資料No.2-1

の1ページを御覧ください。これは、構想図の青い部分の柱、教職員が授業等に専念できる環境づくり、これに対して指標が二つありますが、一つ目の仕事にやりがいを感じている教職員の割合を100%、これが一つ目の指標です。これに対して、グラフを見ていただくと分かりますが、AあるいはBと答えた教職員は91.3%です。9割以上の教職員がやりがいを感じているという回答になっています。一方で、8.7%、円グラフではオレンジの部分で、人数的には11人ですが、あまり思わないという回答もございました。その理由については、例えば業務に対する多忙感とか、組織、人事、評価等に対する慢性的な不満。あるいはICT環境整備に対応していくための不安感。あるいは、自己裁量が減ってきてしまっていると感じていることもその理由になっています。

次に2ページです。これが指標2。時間外勤務時間が月45時間以内の教職員の割合100%、これが指標として目指すところです。これに対する結果ですが、円グラフと棒グラフがありますが、形態の違いで同じ資料のまとめです。このグラフは4月から9月まで6か月間の中に勤務時間が45時間を超えた月が何か月あったのかを円グラフと棒グラフでまとめています。円グラフを見ていただくと、明るい青色が22%になっていますが、この割合は毎月45時間以内という教職員が吉田町全体で22%、人数的には31人でした。それから反対に緑のところ、8月は夏休みなので45時間以内は全部でしたが、8月を除く残り5か月間はすべて45時間を超えていたと答えた割合が緑で32%、人数は45人となります。これを見ますと、棒グラフの一番左と一番右側が一番高くなっているということで、毎月45時間以内に収まっている教員と、毎月45時間をオーバーしている教員が二極化している、あるいは個々で見えていくと、ある程度決まった職員がそのようになっているということで、固定化も見られると思いました。

なお、関連資料として資料No.2-4を御覧ください。これは時間外勤務時間の小中別の推移を表しています。平成28年度から令和6年度までになります。調査を始めた平成28年度と令和6年度までの推移を大雑把に見ますと、それぞれ小学校が水色、中学校が赤の折れ線グラフですが、小学校、中学校ともに時間外勤務時間の平均や人数、これは減少しているということです。特に中学校の減少率が小学校よりも高いということが見てとれます。これが大きな傾向です。裏面は1人当たりの時間外の推移です。

次に資料No.2-1の3ページから6ページの結果について御説明します。これは、構想図の真ん中のオレンジ色の部分の指標についての結果です。子供の「確かな学力」を保障する環境づくりというのがTCPの二つ目の柱になります。その一つ目の指標が、課題解決に向けて自分から取り組んでいると感じている子供の割合が80%以上というのが一つ目の指標です。3ページから6ページまで円グラフが小学校1年から中学3年まで、特別支援学級も含めてそれぞれ

まとめてあります。強い肯定が水色の部分です。大いに思うというものです。自分から課題解決に向けて自ら取り組んでいると自信を持って言える、その割合が水色になります。小学校1年生、2年生は非常に高い。ただ、注目すべきは3年生から6年生になってくると、強い肯定が減ってきているわけですね。小学校3年生の強い肯定は、小学校2年生が64%に対して37%と落ちています。これが6年まで続いていきます。30%台です。ただ、中学校に入ると強い肯定が中学校1年生で56%、中学校2年生が62%、中学校3年生が60%で、中学生が課題解決に向けて自ら取り組んでいると自信を持って言えるという割合がこれだけ多いというのは、ある意味すごいなとまとめていて思いました。

7ページに移ります。指標の二つ目、全国学力・学習状況調査の平均正答率が県平均以上となるという指標ですが、残念ながら、本年度、県との正答率の比較で見ると、小学校は、国語、算数とも県平均には届いていないという状況でした。中学校については、国語が県平均を上回りました。数学は下回ってしまったと。併せて、資料No.2-3を見ていただくと、これは平成25年度から今年度までの平均正答率の県との比較を経年で示したものです。小学校の国語では令和元年度をピークに残念ながら令和4年度からは3年連続して県とのマイナス差が広がっているのが現状です。算数については、本年度、県とのマイナス差が過去最大になってしまいました。一方、中学校においては、先ほど申しあげましたように、国語において平成25年度から初めて県平均を上回ったという結果が出ています。指標2について、全国学力・学習状況調査の平均正答率という物差しで見た時の結果はこのようになっています。

それでは、7ページの中段以降ですが、各施策に対する評価となります。まずは、水色の部分の「教職員が授業等に専念できる環境づくり」の各施策というのは、先ほどの構想図の下にアからカまでありますが、それについての結果が円グラフで示してあります。この中で強い肯定Aの割合が多かった施策というのは、8ページを御覧いただきますと、56.7%の施策があります。学校閉庁の設定。これは非常に効果的だと回答した割合が56.7%。次が、9ページの校務支援のための環境整備、これが非常に有効だったという回答で次に強い肯定が多い施策で37%。一方、強い否定、D全くそう思わないと回答した施策は、率としては多いわけではありませんが、あえて強い否定が多かったのが、10ページ、先ほどの議題であった部活動の地域移行の推進というところで11%が全くそう思っていないと回答しています。この理由として、先ほども出たのですが、進捗状況あるいは情報の周知に対しての不安というか、そういう理由であまりいい評価ではなかったということです。それから2番目に強い否定が多かったのが7ページで、放課後の時間の生み出し、これが7.1%、Cも合わせると35.4%の職員があまり肯定的ではなかったということです。理由としては、放課後の時間の生

み出しというところでやってきたわけですが、実際に教材研究の時間に使えていない現状がある、あるいは、校内研修や町主催の研修の在り方に対して思うところがある、部活動や生徒指導対応があって、なかなか放課後の時間が教材研究、授業の質を高めるための時間として使うことができている現状があるということが回答としてありました。

次に資料の 11 ページから 15 ページです。これは「子供の『確かな学力』を保障する環境づくり」の各施策に対する評価結果ですが、この施策の中で強い肯定、大いにそう思うと回答した割合が一番多かったのが、11 ページの ICT 環境の整備、これは 41.7%の職員が非常に ICT 環境の整備が有効だという肯定的な回答でした。2 番目に多かったのが 14 ページの (27) と書いてありますが、授業に集中できる快適な教育環境の整備、27.6%が強くそう思うという回答でした。一方、強い否定ですが、そう思わないと回答した施策ですが、11 ページの ICT 環境の整備というのが強い否定も多かったです。3.2%ですが、理由としては、ネット環境の整備に対して、もう少しできるとありがたいということで、あまり肯定的ではなかったということです。それから強い否定が 2 番目に多かったのが、同じく 11 ページの魅力ある授業づくりのための支援で (15) の施策ですが、これも 3.2%の職員が強い否定、全くそう思わないと答えています。その理由は、先ほどもありましたが、日々の授業指導の在り方に関してなかなかうまく行っていない。あるいは全教職員研修会の在り方、町主催の研修会については、ちょっと思うところがあるという理由でそのような評価になっています。以上が、教職員それから子供に対するアンケートの結果です。

もう一つ、資料 No. 2-2 というものがあります。これは保護者に対するアンケート結果です。保護者に対するアンケートですが、これは構想図の一番右側の緑色の部分の「保護者が安心して子育てができる環境づくり」ということに対して、二つの指標がありますが、それに対する評価です。一つ目の指標は、子供が楽しく学校に通っていると感じている保護者の割合が 80%以上であること。これは A 評価・B 評価を合わせると 90.6%。肯定的な評価で見れば、指標の 80%は達成しています。一方で C・D と評価した割合が 9.4%です。理由としては、子供が学校に行きたがらない日々の言動、あるいは子供同士の人間関係とか、教師との関わり、あるいは学習に対する不安だとかそういうことを理由に、あまり子供が楽しく学校に行っていないのではないかと回答した保護者がいます。

次に 2 ページ目。これが二つ目の指標。「安心して子育てのサポートを受ける教育環境があると感じている保護者の割合が 80%以上」であることです。これに対しては A 評価・B 評価を合わせると 91.8%の保護者が、安心して子育てのサポートを受ける環境があると回答をしています。指標は達成しているという項目になります。一方、C と D の評価の割合は 8.2%ありますが、理由としては

教師の指導等に関する不安や不満、相談機関との関係について、あるいは安全指導に関してこのような理由でC・Dの評価をしている保護者もいました。

3ページから6ページは各施策に対する保護者の評価ですが、これも強い肯定と強い否定の部分で見えますと、3ページ、4ページにかけてあるのですが、学校給食実施日の最大化というのが(7)になりますが、非常に肯定が高かったです。A評価が44.3%。B評価を合わせると97.4%が非常にありがたいと、いい施策であると回答しています。2番目は4ページ目、5ページ目にあります相談体制の充実(9)ですね。それから学校と家庭との連携、これについてもA評価はそれぞれ13.8%、A、B合わせると89.7%、87.1%と高い評価になっています。一方、強い否定、これも強い否定と言っても、そんなに率としては高くないのですが、あえてDの評価が高かったものを見ますと、5ページにあります家庭教育への支援、これが2.7%の保護者が全くそう思わないという回答をされました。理由としては、学習あるいは宿題等に関する不安・不満、あるいは家庭教育に関して実際に行われているのかということへの疑問などが回答の理由になっているのではないかと思います。そのほか多かったのが3ページで、放課後・休日の子供の居場所づくりですが、これについては2.3%が緑色になっています。理由としては、施設や安全な環境に関する要望、あるいは新たな施設・休日開放に関する事、そんな理由で肯定的な回答にはなっていないという結果になっています。保護者のアンケートの資料2-2の一番最後。これは(15)として、TCPの施策になっているわけではありませんが、子供に対して保護者がどんなことを期待しているのかということアンケートを採ってみました。結果は、そのような形で一番多かったのが思いやりや協調性、善悪の判断、そういった人間性や社会性を育んでもらいたいというところが1番の割合としては多くなっています。以上、TCPトリビンスプランのアンケート結果についての説明を終わります。

○田村町長

事務局からの説明が終わりました。まずは、教育長から総括的にお願いします。

○山田教育長

冒頭、教職員の時間外のデータの紹介がありましたが、これを見ると中学校は平成28年度から比べると、どんどん時間外が減っているという状況がありますが、これだけ減っていても教員は負担感があって、忙しい忙しいと常に言っています。例えば、学校の教育環境の整備もそうですが、みんな他市町から異動してきた人たちは、ものすごく環境が充実していてありがたいと言ってくれるのですが、何年か経つと今のこの環境からさらに高い要求をしていきます。働き方改

革で時間がどんどん減ってきているけれども、もっと減らしたいと思っている。現状をベースに考えてさらにもっと減らしたいというのが、こういうアンケートとか実態を見ていて分かったと思っています。

それともう一つは、アンケートを教員や保護者から採ると、4段階で採っているので、以前は5段階で真ん中にどちらともいえないという選択肢があったかと思いますが、そういうアンケートを採ると大体真ん中のどちらともいえないが非常に多くなる傾向があるので、4段階にして肯定なのか否定なのかという採り方をしているかと思いますが、こういうアンケートを採った時に、信用していいか疑問だなと思うのは、色でいうと赤色の概ね思うという回答で、割とここに付けたがると思います。明らかに青である、大いに思うと強く肯定をしてくれている意見であったり、逆に全く思わないという緑であったりというのが、すごく大きな指標というか、このパーセンテージがどうなっているのかというのが、我々が施策を打っていることに対してどう評価されているかを見る目安になるのかなと思いました。

そうした意味で、内容によっては特に保護者の回答は、施策云々というよりも直面して対応しているのが学校なので、学校の対応に対するという意見も結構たくさん入ってきているので、TCPの施策そのものが必ずしも見えてこない部分もありましたが、やはりアンケートを採ると、そうした強い肯定や強い否定に着目した時に、その原因は何なのかと、特に緑については、その原因は何かということを探りたいということで、CとかDの場合の理由を記載するような形になっているので、多分いい理由もいっぱいあると思うのですが、今回はそういう否定的なコメントがたくさん入っているということなので、委員の皆さんからはそうして見た時に、我々が採っている施策としての環境づくりについて、もっとこうした方がいいのではないかとか、こういうところがうまくいっているから推し進めていけばいいのではないかとか、そういうところで御意見を伺えるといいのかなと思いました。是非率直な意見をお願いしたいと思います。

#### ○増田委員

まず教職員の環境づくりの点ですが、こんなに高い賛同を得ていることは評価してよいと思うのですが、まだまだ多忙感を感じている人が多いというのは、事実だとは思いますが、そもそも社会人で多忙感を感じていない人なんていないのではないかとと思いますが、この部活動の在り方が変わって行って、事務も非常に効率化・合理化をしているところですので、そこが馴染んでくれば変わってくるのかなという気がしています。

ICTに関して否定的な意見が多いのは、やはりWi-Fiの接続が弱い、多人数が一度に利用するとつながりが悪いというところはやはり改善すべきとこ

ろではないかなと思いました。前半の部活動の話でもありましたが、やはり情報が伝わっていないというところに大きな不安を持っていると思いますので、会議録などを積極的に情報発信していただいた方がいいと思います。

子供の環境づくりのところですが、課題解決に向けて自分から取り組んでいる児童生徒が非常に多いですが、学力が上がらないというのは、そういう思いはあるけれども、課題解決の方法や取組方の指導が足りていないのではないかと、学び方をもっと指導をしていただくように先生にお願いできればなと思いました。

意見にもありましたが、特に小学校の低学年の基礎学力の定着には、反復というアナログでの教育が非常に大事ではないかと思っておりますので、デジタルとのバランスを考えてやっていただきたいなと思いました。

個への支援というか、より多くの支援を求めている方もいらっしゃるのですが、以前コロナ禍でオンライン授業ができた時があったと思うのですが、学校に来られない児童生徒には、オンラインの指導教育も有効ではないかと思うので、御検討をいただければと思いました。

親御さんですが、私も強く思うのが家庭学習のところですが、今は宿題が出ないようで、それぞれの学習進度に応じて自分が考えるということですが、それがやれる子はいいいのですが、やれない子は全くやらないということで、より差が付いてしまうという不安を持っています。あと、分かったつもりで学習したことが定着していない子がいると先生も書いていますが、私もそれは授業を見ていて思っています。その場ではみんなで協議をして分かったというふうに思うのですが、それを落とし込むところが少し弱いのではないかと思いますので、それを家庭学習、宿題を通して、授業で印象に残ったことを書きなさいとか、そんな宿題を出してもらえると定着につながるのではないかと思います。

#### ○大石委員

増田委員のお話と重複するのですが、町長が最初におっしゃったアナログとの両立といったことですね。常に、AかBかではなくて、AもBも大事だよという、そんなところが重要なのかなということで、例えば読解力、学力調査を見ると、国語が中学生の点数が良かったのはいいのですが、ICTが取り入れられている一方で、文章を声に出して読むなどの反復、よほどの天才でなければ、多分物事って1回教わっただけでは定着しなくて、その日のうちに復習するとか、家庭学習も含めて、やっぱり必要なことかなのではないかなと私も思いました。特に語彙力や読解力は、スポーツで言えば筋トレと同じように、決してそれ自体は楽しいものではないのですが、やっぱり基礎体力が必要なことかなと思いました。

あとは先生方のやりがいですね。ここがやっぱり生徒に見えてくるのかなと思います。やはり先生方がやりがいを持って生き生きと仕事をしていることが

非常に重要だなと思います。ただ、何の仕事でもそうですが、8時間労働にずっとやりがいがあるかというところ、9割はやりがいが少ない地道な作業が多いですが、そういうところも含めて、どういうところに教師はやりがいを求めて、人それぞれだとは思いますが、やはりある程度はあると思います。その中で、何がやりがいを感じていないのか、ここに否定的なものに関する意見が書いてありますが、今若い子たちでよくあるのが、実際にその仕事に就いてみたら思ったことと違った。これは民間企業でも非常に多いのですが、どのようにやりがいを見いだしてもらうのか、あるいは、教職員の中途採用もやられていると思うのですが、そういう教職員の方をどうサポートしてフォローしていくのか、民間企業も全く一緒ですが、大事なかなと思いました。

先生方の時間外勤務に関して、令和3年まで減って、そこからまた中学校で少し増えていてというところが、これは小学校の方も若干増えている部分もあるということで、何が理由なのかなと思います。この令和3年というのは、コロナの影響もあるのかなと思いますが、そこからまた今後も増え続けるのか、抑えられるのか、その辺りが非常に重要なのではないかなと思いました。

資料No.2-1の14ページ。つながりや交流の在り方ということで、地域との交流はありますが、「子供の交流はもちろん、職員との交流もあるといいなと思いました。」や「特に、小中の連携が希薄だと感じる。」という部分が結構重要なかなと思いました。子供にとっては保育園、幼稚園、小学校、中学校でそこから高校に進学するのかわからないのかが一連の流れで、昔は兄弟がいて、兄弟からいろいろ情報が入ってきましたが、今は兄弟の数が少ないので、あるいはあまり親同士が地域において話をする時に、先ほどの話じゃないですけど、〇〇らしいよみたいな、そういう噂ばかりが先行して、何かそういうところでいろいろな情報のゆがみが起きているのではないかなと私自身思っています。先ほどの部活動の話もそうですが、やはりそういうところのきちんとした連携が大事なかなと思います。

先ほどの探究の授業とかも関係しますが、子供たちが将来に夢を持つとか、何かで学ぶことにやりがいを持つということは、結局今の世の中で自分の生活とリンクしていたり、あるいは自分の好きなこととリンクをしていたりすると、非常に楽しくなってくる部分がありますし、やっぱり中学生・高校生になってどういふことを学ぶのか、そういうところは一つのつながりとして見えてくるというのが非常に大事だと思っています。割と進学塾とかに行っている人たちは、それを教えられています、進学塾で。しかし、そういうところに行っていない子は、今日の勉強が将来何の役に立つんだろうとか、何かつまらないなとか感じているので、そういう子供に、何で今これやっているのかなどが見えるような学習スタイルが大事だと思いました。

○中村委員

まずは、先生方の部分ですが、自分も学校評価をやってきた経験がありますが、自分の経験からすると8割以上というのは高い評価で、90%を超えることはなかなかないなという経験があるのですが、その中で町が採っていて、いろいろなものが90%を超えるというのは、それはそれですごいなと単純に思います。ただ、一方で「大いにそう思う」が少ないところもあるので、そこは気になるというか、大体ざっくりいうと4分の1ぐらいが「概ね思う」や「大いに思う」と言ったらかなりいいのではないかなと思いますが、概ねいいと言いながらも大いに思うという人が10%前後あたりというのは、いろいろな課題を残しているかなと見るができると思いました。特に、てこ入れをする必要があるのが10%前後あたりかなと思います。4分の1あたりであれば施策としてはいいのではないかなと思います。校務支援といったものは、かなり満足しているのではないかと思ったりします。その一方で、例えば魅力ある授業づくりのための支援など、満足していないと受け取れるかなということを教育長の話聞きながら、なるほどと思っていました。

先生方の働き方は、先ほども話題になりましたが、要望は限りがないので、時間外勤務が下がってきても忙しいと言う人は忙しいと言うだろうし、忙しくない仕事があるかという問題もあるかと思います。大事なのは、やりがいを感じているかというところがとても重要なかなと思います。それについては、先生方が一番思うのは、自分が考えてきた授業がうまくいくとか、子供への対応がうまくいったとか、いい反応が返ってきたとかというところになるかなと思っています。そういったところが感じられるといいかなと思います。その一方で、一生懸命やっているけれども、問題は学習状況調査のことになると思いますが、そうは言っても本町では県外の方々も非常にたくさん来ていただいて、かなりの評価もいただいているのではないかなと思います。その中でこの結果は非常に残念ですが、先程も話があるように、概ね新しい授業の在り方の取組としては、いいのではないかなと思うのですが、それでもうまくいっていない部分があるというのが定着の部分というか、グラフで言うと、山が二こぶになっていて、低い方の山をうまくすくえていないところがあるのではないかなと思います。その点についても、自分がうまくやれていないなと感じたところを信州大学の佐藤先生が、先生方に講話をしていたりするので、やり方はそのままでもよいのかなと思いますが、うまくいっていない部分にてこ入れをしていただければありがたいかなと思います。正直に言って、単純にテストの力を上げるのであれば練習すればいいのですが、練習して学んだことが成果と言えるかというところ、そうではないのではないかなと思います。成果は全くないとは言いませんが、やはりあり得

るべき姿としてやっていくというのが大事だと思うので、そういった今までの授業改善の取組は継続していただけるといいのかなということは思っています。

それから、子供たちの反応ですが、子供たちの課題に取り組んでいるというようなことはすごいなと感じるところです。これも先生方の意識が子供たちに伝わっているのではないかなと思います。小学校の中学年・高学年が低くなるのは、なぜだろうというところはあるかもしれませんが、中学生がこれだけ主体的にやろうとしているというのは、大いに評価ができるのではないかなと思います。先程の半数以上に近いほぼ全員がそんなことを思っているというような感じとして受け取れなくもないというふうに思います。

あと、個に応じた支援については、12 ページにあります。これは町の施策として、先生方自身が個々に対応をしていくという自分の指導の振り返りではないものだから、何とも言えないのですが、そういった町の施策と先生方の個に対する指導が懇ろになってくると、さらに評価が上がっていくのではないかなということをおもっています。

#### ○北澤委員

先生たちの働き方で、80 時間を超えた先生というのがまだいらっしやって、これも固定化されていると思うのです。誰がというのは分かっていると思うので、早急に声を掛けての改善をしていかなければいけないという現実もまだまだあると思います。先ほどから少しお話が出ていましたが、職場環境の課題でもあるのかなということも感じました。何年かこのTCPトリビンスプランのアンケート等を見ていく中で、学校内での情報伝達等ができていくのか、コミュニケーションが取れているのかという部分も毎年声が上がってきて、否定的な意見の中にもそれが現れているのではないのかなと感じています。学校だけの問題ではなく一般の会社でもあり得るものなので、こういったものは職場の環境として、風通しよく誰もがこのトリビンスプランをうまく活用できる環境になることをまず第一にやっていただきたいなと感じました。先生たちにやりがいを感じてほしいなということを保護者としては思っていて、子供と接している人にやりがいがないと言われてしまうと、なかなか悲しいものがあるなというのが正直なところではあります。

子供たちの教育を担っていただけていますが、それに携わる職であるということは、先ほど教員不足の話題もありましたが、自分自身も簡単になれる職業だとは思っていないので、先生として子供たちに携わっているというところで、周りからの期待や自分の理想・夢とまた違って、現実的に期待が重かったりすることで業務がなかなか大変だということもあるとは思いますが、期待があるということは、それほど大事なことを担っているということをもう一度分かっている

ただきたいなと感じます。

家庭との連携、学校と家庭との連携の部分で、保護者のアンケートの方にありますが、ここがしっかりしていないと家庭学習の問題がうまく通じていない部分やお子さんの学校への不信感も拭えないのではないかとということもあるので、家庭と学校との連携の部分これからどんな形を作ればいいのか、先生たちの負担感が増えないように、家庭からも分かりやすいような発信の仕方があればいいなと感じました。学校というか先生が宿題を出さないということに対して、何で出さないのかが分からない御家庭も多いと思います。そういったところで不安があると思うので、連携が取れる方法を考えていただければと感じました。

トリビンスプランの教員・子供・保護者の三者がうまく連携が取れるような、子供たちが家庭にも支えられていて、先生たちにも支えられている環境だということを感じ取ってもらえるような施策だと思うので、うまく活用をさせていただきたいと思います。課題はずっと尽きないと思うので、ICTを導入して、環境整備ができたとしても、先生たちの一部では使い勝手というところで意見が出てくることは致し方ないですけど、改善策は必ず出てくると思うので、そういったところにはしっかりと目を向けて改善していただきたいと思っています。

小中のつながりを先ほど言われましたが、私も全教職員研修を見させていただいて、この数年で雰囲気がとても変わって、参加する先生たちも活気づいているなというのが印象としてあります。小学校の授業を見ている中学校の先生方がすごく興味を示して、どんどん意見も言われて、意見交換をされている姿を見ていくと、連携がだんだん取れてきて、そういったところが子供にとってもプラスの面になるのではないかなというのを感じています。小学校では今こういう教え方をして、この子たちはこういうふう to 育ってきているというのを、中学校の先生方が知る機会ができたというのが良かったなと思います。どんどん意見交換をして、チャットを活用されていて、日常的に小中学校それぞれの様子が分かるようになってきていると思うので、これからもそういったものを活用して、うまく連携を取っていただきたいなと思っています。

アンケートは否定的な意見だけを載せているということでしたが、こういった小さな意見や少ない意見でもどんどん言える環境、吉田町はそういうことをどんどん拾っていきますというあらわれもいいのかと思います。保護者もこの場でどう答えていいか分からないけど、今私はこういうことで悩んでいる、こういうことが不満なのだということも言えるような場として、アンケートもすごく有効的に使えるのではないかなと、こういった意見もありがたいのではないかと思います。先生方の率直な意見を聞ける機会もないので、この先生は本当に大変なのだろうなど、いいことばかり言ってしまう人もいるのだろうけど、本

当にこういう先生も絶対にいるはずなので、そういった意見を聞いて良かったなということもあります。ただ、改善につながらなければ何の意味もないので、教育委員会だけではなく、学校にしっかり返して、職場環境もそうですけど、T C Pの持続可能なプランになるような施策を生み出してほしいなと感じました。

○田村町長

教育長にお聞きしたいのですが、役場の職員は総務課長や上長が個人的に面談をして、いろいろ話を聞きますよね。仕事に満足しているかとか、満足していないとか、こんなところは直してほしいとか、僕はこういう部署に行きたいとか、ある程度個人を把握するようにするのですが、先生も個人面談はあるのですか。

○山田教育長

私たちがやるのは管理職です。校長、教頭との人事面談をやったりしますが、職員とやるのは学校の校長、教頭が職員の面談で思いを聞いたりして、校内人事に生かしていく形になります。

○田村町長

先生の意見の中で、やりがいがないとか、やりがいを感じないとか、そういう先生が実際にいるのですか。

○山田教育長

私もこれを読んで、「私自身この仕事をずっと続けたいと思えなくなってきているので」ということが、教職という仕事に魅力がないのか、今いる職場の魅力がないのかというのは、何ともここからは判断ができなくて、多分、我々がやりがいを感じている時は、その職場の雰囲気もかなり影響してくる気がします。こういうふうにやりがいのあるなしという原因が一体何かということは、調べてみないと分かりません。

○田村町長

先生にとって、やりがいのある生徒との向き合い方は、自分が授業をして子供が自分でやる気になって答えを出すという雰囲気を作ることが一番やりがいがあるわけですね。最初に増田委員がおっしゃったのですが、子供たちが自分でやる気があるというパーセンテージが高いですね。その子供たちに対して、先生はどのような教育や授業をしているのでしょうか。先生も仕事にやりがいがあり子供たちもやりがいがあって、子供たちが自分たちから取り組んでい

こうとする姿勢があるが、一生懸命やっても成績が上がらないということは先生の教え方ではないのですか。勉強の仕方を教えない、ノートの取り方を教えないとか。どうなのですか。私には分からないのですが。

○中村委員

先ほど家庭学習の話が出ましたが、家庭学習の話を例にとって、それが合っているかは分かりませんが、自分がそう思うというのですが、先生方は子供の主体性を生かそうと思って、あるいは子供の興味・関心を大事だと思って、子供たちに宿題を自分で考えてやりなさいよと言う。ところが、もう少し踏み込んで言わないものだから、子供はどうしていいか分からないと言う。考え方としては間違っているのではないのだろうけれども、子供が今どうしたいのかをもう少し聞いて、ではあなたはこうなさいよ、というアプローチが足りないような気がします。それは授業も同じで、子供たちはやる気があると言っているし、それを引き上げようと思って先生方もやっているのだけど、そこまで終わっているけれども、ではどうすればいいのかというところが1歩少ないものだから考え方として良いのにうまく回転していかないような感じがします。

○田村町長

教育者が子供に対して、こういう子供になってもらいたいと。自分で課題を見つけて、自分で考えて、自分で取り組んでいく子供を育てればいいわけですよ。それは最高の子供ですよ。やる気があるにもかかわらず成績が上がらないというのは、教え方がどこかずれているのですか。

○中村委員

もう1歩足りない感じがします。その辺りは、佐藤先生がこうした方がいいよというようなアドバイスをしているという今はそのような感じであると感じています。

○田村町長

君は何が分からないのと聞きますよね。こういうふうに分かたらしいのではないか、こういう勉強をした方がいいのではないかと、そういうふうな形で子供の勉強の仕方に対する介入はないのですか。自分で考えなさいということほど無責任なことはないです。分からない子はどうしてもさっぱり分からないと思います。

○中村委員

今、保護者はそう感じていらっしゃるということですよ。そこら辺が先生方としてはやっているつもりかもしれないけれども、受け取る側としてはそこまではまだ受け取れていないという意識の齟齬がまだあるのではないですかね。その1歩を踏み出せるといいのではないかと自分も思うのですが、それがなかなか難しいですね。

○田村町長

子供にノートはこのように取りなさいよとかこういうふうに考えなさいよということは教えないのですかね。勉強の仕方を教えないのですか。考え方とか。非常に不思議です。

○中村委員

やっているとは思いますが。それでも、授業を見ている中では、もう少し踏み込んでくれると、子供はすっきりとやれると思うことはあります。

○田村町長

望ましい先生と望ましい子供の関係というのは、どうあればいいのだろうといつも考えています。最初に増田委員がおっしゃられたことですが、非常に自分で課題を考えて一生懸命やろうとしている割合は増えている、増えているにもかかわらず成績が上がらない。教え方がおかしいのではないかと普通考えますよね。

○山田教育長

小学校1年生には小学校1年生なりの教え方をしないといけないと思います。小学校1年生と小学校6年生に同じことを言っても、それは当然通じません。やはり、小学校の先生も段階によってどういうふうにして、子供たちに任せる部分を多くしていくかでないかと、主体性を育てるといって子供に放り投げるだけではなかなか育つものではありません。例えば、同じクラスの中で一斉にやっても、クラスの中に35人いたら、人によって全然違うので、関わり方もきっと変わってくると思います。

我々の時代は1ページ学習とかをやりなさいとか言われて育ってききましたけど、結局1ページをやる内容は個に任せられているならば、自分で考えながら自分の足りないことをやる形になります。漢字をやるにしても、何ページをやりなさいではなくて、その子が足りないと思っているところをやってくるとか、個に任せる部分はどうやって段階的に増やしていくのかということをやりながら、自分は今こういうことをやらないといけないということを自覚しながら、学ん

でいく、やらされるから自ら学んでいくというところを育てていかないといけないのかなと思います。

○田村町長

どういう子供に育ててもらいたいのか、その子供の像がありますよね。その子供に自分で考えろと言われても、自分で考えるって何を考えるのか分からない子供の方が結構多いですよね。考え方といったような教育はあまりしないのですか。

○中村委員

そんなことはありません。例えば、この資料を使ってということはやっています。あるいは、今までこのように考えてきたから、この考え方を使ってというようなこともやっていますが、そのようにやっている中でも、新しい課題は、それをやってもできないから新しい課題が生まれるので、その疑問のところをもう1歩踏み込んで、アドバイスをするといったことが結構難しく、それは僕が教職員の時にも先生方にこうした方がいい、相手はこんな疑問があるのでとは具体的に示しても、そうかその時は言うのだけれども、では自分で授業を考える時にできるかという、なかなかできないという、そこは難しいですね。

○田村町長

なぜそういうことを言うのかという、教育長には常に言いますが、全国学力・学習状況調査の結果、吉田町というのは県の平均を超えないということは本当にあり得ないですよ。なぜそんなことがずっと続くのか不思議でしょうがない。そんなことはあり得ないことですからね。私はよく分からないのですよ。先生方はどういうふうに教育しているのかと、そういうことを本当に個別で聞きたくなります。教育長からすると、うるさい町長だなんて思われるかもしれませんけどね。

○中村委員

是非、学校に行って授業を見ていただくといいと思います。昔と違うことは歴然としていますし、それが間違っているのではなくて、時代のすう勢だとは思いますが、先程から言っているように、それでも物足りない部分があるので、そのところが研修のしどころではないかなと思います。

○田村町長

なぜ県の平均を超えないのだろう、いつも県の平均の少し下にいるのだろう

と。問題が何を述べているかが分からない、文章そのものが分からない、そういう子供が多いのではないかと思います。問題を読んで、何を求めているのかを理解すれば答えは出るようになっていきます。しっかり読めないから答えを間違えることは分かりきっています。そういう最も基本的なところの文章理解力が劣っているのではないかと、先生方がそういうところをどんなふうに教えているのだろうと素朴な疑問があります。

○増田委員

先生方は、もちろん熱心にされているのですが、中村委員がおっしゃったことは僕も思います。もう一步のアプローチだと思います。

○田村町長

有名な新井紀子先生。あの先生のテストをやるとズバリ出ますよね。ほとんどの子供が文章理解できていないから答えが出ない。文章を理解できている子供は必ず正解するという結果になります。だから、文章を見て、何がここで言われているか分かる子供を育てるとするのが基本だと思います。

○中村委員

実際に自分が教えていながら、それを感じることはよくあります。薄めて読んでいるというか、だいたい読んできちんと読んでいないから雰囲気ですべて答えている感じがしますね。主語を捉えて、設問を捉えて、問われていることの意図を理解するようなことは、意外とやっていないですし、問題の解き方というようになってくるので、あまり授業ではやらないかもしれないなと思います。

○田村町長

大石委員は厳しい経済界・実業界にいらしているのですが、どう思いますか。

○大石委員

今回は資料が出ていませんが、恐らく小学校低学年は割と正規分布で綺麗な山がだんだん学年を追うごとに崩れていって、両方に開いていくというか、これ平均点で捉えているところと、中央値がどこになるのか、山の形がどうなのかというところを見ると、そういうことなのかなというのが見えてくるのかなと思います。これを教育界で言うかどうか分かりませんが、南北問題とよく言いますが、東海道線沿いは高校もいろいろあって、親も進学の熱が高いところと、海沿いの例えば遠州地方の海沿いは、特に震災以降、土地が下がってそこに外国人も増えている中で、外国人も当然学力テストは受けているわけですよね。そういう

ところで、そもそも日本語が読めない子が相当数いるのではないかなと思います。当然、企業の中でも外国人が増えたなと感じますが、外国人の比率がどうなのか、あるいは先ほど家庭学習と言いましたが、やっぱり理想型を追い求めれば求めるほど、最終的には家庭での学習の差がものすごく開いてしまって、家庭学習は家庭についても根気強く言っていくけれども、そこはどうしようもないよねと言ってしまうとそこでおしまいじゃないですか。そういった家庭の子に対して、どういうフォローを公教育としていくのかとか、そういうところに突破口があるのかなと感じます。いろいろな体験の差は大きくて、ずっと家でゲームばかりやっている子と、ある程度親がいろいろな体験をさせているというところでは、やっぱり物事に対する好奇心も変わってくると思いますし、そこは言ってしまうときりがないのですが、そういう問題があった上で、どういう家庭学習に問題がある子をベースアップしていくかということが一つ課題なのかなというのはすごく仕事上でも感じますし、教育も一緒なのかなと感じます。

#### ○北澤委員

自分の経験からいうと、うちの子たちは宿題をしっかりと出されていて、特に提出を守ることがキーワードにあった記憶があります。親としては、そこまで見守って、中学校の三者面談で学校に聞いて、家でもう1回やらせますという会話をした記憶があります。保護者は、学校というか学習のことを全て知っているわけではないので、自分の経験の中で子供にどこまでアドバイスができるかというので、やはり差が出る部分もありますし、不安も出ます。うちの場合は学習塾に頼ったりして、学習面のサポートをしていました。私の上の子は、小学校の先生がすごく見ていただいて、子供に足りない分のアドバイスや課題をいただいて、すごくありがたかったなと感じています。あの時に家庭学習というか自分の課題を放課後にやるという習慣付けの基礎になったなと感じています。それこそ、子供にも親にも言っていただいて、コミュニケーションが取れての話だったので、今のお母さんたちの声を聞くと、そういったものがないのかなという不安があります。それが先生の多忙につながっていたのかなという反省点もあるのですが、子供の課題が何かを親もしっかり知りたいというのが一つあって、その課題と一緒に取り組むというベースがあって、一緒にやるなり、課題を見つけるなりということがあると思います、家庭では。それで、見守りがあると思います。御家庭で全国の学力・学習状況調査でいい点を取ることが目標というわけではないと思います。ただ、その子供に合った学習目標はあると思います。そういったものをしっかりと捉えるためには、学校で今何をやっていて、子供のつまづいているところはどこなのかというのは知りたいところだと思います。そういったところをICTの活用で学校での様子がタブレットを開いた時に見ること

ができたらいいなとか、今までは単元テストの点と中身を見て、何でここができなかったのか見る機会があると思うのですが、そういった面でも親の多忙な部分を補助するためにも何か情報で子供がしっかりと自分が学校で見直しをしたのかとか授業の中で復習なり何なりをしたのかというのは、すごく重要なのではないかなと思います。テストをやりました、返ってきました、駄目だった、はい終わりという横流しになってしまっていては、向上しないのではないかなと感じていたので、子供たちの実態をしっかりと有効的に掴むためには、学校も研究してくださっていると思うのですが、その中身が戻ってこないのも、そういったものをしっかりと家庭にも分かりやすく戻してもらいたいなということがあります。簡単というわけにはいかないかもしれませんが、それこそICTを使っている何かがあるといいなと感じました。

○田村町長

つまり、良き先生との出会いですね。

○北澤委員

そうですね。

○山田教育長

学力の定着や向上に関しては、いろいろな意見がある中で、これをやればできるという一つの正解があるわけではないので、いろいろ関わっていくしかないと思いますけど、今、町がやっているTCPトリビンスプランというのは、教員の環境づくり、子供のための環境づくり、保護者にとっての環境づくり、全てをトータルして何を目指しているかということ、子供の成長につながっていきます。教員も自分が楽をするための環境づくりではなく、教員が教員としての仕事をするような環境で子供たちを育てていくという視点を持ってほしいし、親は親で任せきりではなくて、親も子供のために家庭での在り方を考えてほしいし、子供はもちろん自分との関わりの中で自分をどう成長させていくかを考えないといけないということで、三者共益の一番の中心になっているのは、子供であるということを忘れないように施策も組まなくてはならないし、みんなが意識しないといけないのかなと、そんなことをTCPに関しては思っていますので、これからもぜひ皆さんからもいろいろな意見をいただければと思っています。

○田村町長

皆さんからたくさんの意見をいただきました。また、みんなで考えていきたい

と思います。ありがとうございました。

それでは、事務局にお返しします。

### **3 閉会**

#### **○事務局**

それでは委員の皆様、長時間にわたりまして議論をいただきまして、誠にありがとうございました。

以上をもちまして、令和6年度吉田町総合教育会議を閉会します。最後に相互の挨拶をいたしますので御起立ください。一同礼。